
優のアルバム

青眼龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優のアルバム

【Nコード】

N0492A

【作者名】

青眼龍

【あらすじ】

主人公、隆司は、昔の彼女優のことを今まで誰にも話さなかったが、妻となった佳奈子に初めて、優との思い出をはなしはじめる・

「さつき小耳に挟んだんだけどよ、4組にはかわいい子が多いらしいぜ」

「そんなことどうでもいいよ・・・」

「どうでもよくねーよ！可愛い子に囲まれるの最高じゃねーか」

「おっとそろそろ戻るわ」

「ちよつと待てよ！！」

隆司はとても緊張するタイプのため、知らない人ばかりの教室は地獄のようだったらしく、少しでもリラックスするために、創太となるべく一緒に居たかったのだった。

教室に先生が入ってくる。

「みなさん初めまして、桜佳織と言います。これからここの担任をさせていただきますのでよろしく」

そして、先生の簡単な自己紹介などが終わったあと、クラスの顔を覚える為とか言って適当な雑談をすることになった。

「優さんとは同じクラスになったの？」

「なったよ。でも、みんなと喋る時までには一緒になったこと知らなかったんだ」

佳奈子は不思議そうな顔で言った。

「なぜ知らなかったの？クラスが一緒ならすぐわかるはずだと思うんだけど・・・」

「緊張してたから、とりあえず自分を落ち着かせるのが精一杯だったんだ」

佳奈子は、少し苦笑いしながら言った。

「ほんとに緊張しやすい人だったんだ」

「あのころは本当に幼かったからね」

隆司は話を反らすかのように言った。

「続きを話すよ」

「話せつて言われてもなあー・・・知らない人ばかりだし・・・」
隆司はそう言いながら視線を下げようとしたとき、声が聞こえた。

「もしかして加藤君？加藤君だよな？」

へっ？とした顔で前を見た。

「もしかして・・・七海さん？」

優は嬉しそうに言った。

「やっぱり加藤君だ」クラス一緒だったんだね」

「七海さんも4組だったんだ。」

「よかった」知らない人ばかりだから、緊張しちゃって・・・
加藤君は？」

「俺も知らない人ばかりで緊張してる・・・」

「でもよかった」加藤君がいるから少し緊張がやわらいだかも」

「これからよろしくね」

「こちらこそよろしく」

隆司は、そう言いながらも心の中では目の前に優がいることで余計に緊張していたのだ。

「時間だからそろそろ席に戻るね」また喋ろうね」

優は自分の席に帰った。

「では、今日はこれで、解散です。明日から授業があるので、ちゃんと教科書などを用意してくださいね」

「隆司はその頃優さんのこと好きだったの？」

「いや、あの頃は優のことよりも、緊張のほうが大きかったから何

を喋ったかとかあんまり覚えていないんだ。」

「そうなんだ」

「少しのどが渴いたから、飲み物持ってくるよ」

隆司はそう言いながら、冷蔵庫に向かった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0492a/>

優のアルバム

2010年10月13日03時27分発行